

## アルゼンチン

### 移住者の声



#### 移住という旅

アルゼンチン在住 生駒 節

日本の初春、1964年(昭和39年)3月30日、東京オリンピックの年、神戸で乗船。55日かかって当地アルゼンチンのブエノスアイレスに5月25日(独立記念日)に着きました。秋も終りに近いころでしょうか。時間差12時間、気候は正反対の国に。これが旅の始まりです。

休日とのことで船から出ることも出来ず、一日船上泊まりでした。ラプラタ川は濁った水でした。(ブエノス港)次の日入国して、いろいろな手続きをして、1週間あまりして、汽車で1200・先のメンドサ州アンデス山系の麓、海拔700mの移住地に行く旅です。途中パンパ平原、牛馬の放牧と、のんびりしたいいい天気でした。

アンデス移住地は真っ平らで遮るものは何もない所でした。まず馬を買いました。畑を耕し、作付けに必要でした。10年近くで三頭の馬を殺しました。夏の日中でも仕事の都合で無理に使います。そして疲れた馬、自分と一緒に働いた馬、今でもありがたうと思ひ出します。



出航のとき(左から3、4人が生駒夫妻)

入植当時、自分の家が出来るまでは事業団の仮住まいから2・離れたロッテ(自分の土地)まで馬ゾリで通いました。簡単なものですが、日常使う大事な道具の一つでした。この馬ゾリで私の仕事をしている所にカアちゃんが握り飯をよく運んでくれました。ソリから落ちたこともあったようです。

そのころの仕事で水路掘りがあります。このメンドサは灌漑農業で、1町歩に18分の水が水利権で「8日と8時間」に一度ということで、これが南米のカリフォルニアだそうです。おそらく本当の北米カリフォルニアを知らない人が云った事でしょう。(大差あり)こちらはインディオの住み家です。

このあとと思ひ出したくない出来事が山と有ります。風害、雹害、デノミ、インフレ(0が15もなくなる)いろいろありました。季節風アンデスおろし(インディオ・カリエンテ)、(嵐のこと)等々が代表格でしょうか。中でもアンデスおろし、灌漑農業は水路掘り(造り)から始めます。1週間かけ、自分にムチうち造ります。いつくるかアンデスおろし。短期作トマト、ピーマンなどよく作りましたが、馬で耕しますが一番耕は固くなかなかでした。1日半町歩位だった。2から3回耕し、1回ごと水をかけます。8日間と8時間に一度の

水の順番に合わせて、植付け準備しておきます。この8割方完了した時などに嵐が来ると砂漠状にしているもので、ひとたまりもありませんでした。やり直しの繰り返しです。砂がサラサラ音を立てて動き出すと大変。3年、5年と水路にポプラが育ったところから落ち着きます。そして3年育てた桃、ブドウの主作物もボチボチ花を付け、これで良しと思いきや、夏の盛りには日中昼寝をします。

35°Cにもなれば土は焼け、素足で外には出られません。雹の通り道があります。我が家はこの中心であった様な感じでした。植え付けたもも、ブドウなど2、3年と育てた収穫に入る作物であっても、1回の雹で全滅でした。短期作のカボチャ、メロン、トマト、ピーマン、それに玉ねぎもやりましたが、収穫出来る前に土から出ている部分が切り取られる様に上部がなくなったこともありました。

1町半位の面積でしたが、初年度から植え付けを始めましたが、収入はゼロのこうした風害と雹外、霜害、塩害等々それに関連するいろいろのことを今でも昨日のこのように思い出します。一回など、あってはならない水害があり、町に行く道にある排水路の橋が流され、ぶら下がった(コルガード)移住地と云われました。

雪も16年半の内に一度、1m以上も積もったことがあり、近辺で天井が落ち大変でした。冬のことで手づかみでウサギ、スズメなどいくらでも取れました。焼き鳥もあまりうまかったとは思いませんでした。

1964年12月10日、長女の誕生日です。15キロ離れた町、アルベアル市の病院で生まれました。悦びの子、悦子(エミリア)と名付けました。私、28歳でした。それから1年3ヶ月後、長男。2月23日で浩宮様と同じ日でしたので祖父が浩樹(エクトル)と名前をつけました。浩が生まれた時などはエミを背負ってブドウの収穫の監督をしたものです。産後は15日間妻に休んでもらうために家族のメシ作り、農作業とどうしても人夫を入れないことには出来ませんでした。でもこのころはアルマセン(店)は通帳が主流で本当に助かりました。肉などは1・70円位だったと思います。電気の無い生活でしたので四面アミで作って、風通しの良い日陰に置けば2、3日は大丈夫でした。毎日のランプの掃除も今となっては懐かしい思い出です。

その後3人の子供に恵まれ、3男2女です。学校に入学し、上から中学校に入ります。町に下宿させることとなります。このころから本当にタケノコ生活の始まりでした。子供の教育を考え、ブエノスアイレスに出ることを決心しました。

いろいろなことが有り、自分はこんなことをしていいのかとか、どうしてこうになってしまうのか、どうして日本に帰れないのかとか。それでも亜国で今も細々と生活しています。元知事の金子さんに云われたことの中の「土地を愛し、仕事を愛し、妻を愛し。」に惚れてしまったのでしょうか。

アンデス移住地での生活も16年半、そしてブエノスに転住してすでに23年間が経ち、40年近くになろうとしています。現在の仕事は花卉業になりましたが子供たちもそれぞれ独立し、残って手伝っているのは三男だけになりました。美しい花を見ながら、毎日楽しく仕事をしています。また、昔可愛がった近所の子が一度は日本に戻ったのですが、今度は会社のエライさんになって20年ぶりに家族で訪ねてくれ、旧交を温めあい、釣りに出かけたなりと嬉しいことでした。また、農大生、拓大生とか何人もの若者たちがアンデスに研修に来て1、2ヶ月過ごしていったのです。その中の一人の若者がブエノスに定着していて、30年ぶりに我が家を探しあて、訪ねてくれたこと、どんなに嬉しかったことか、言葉に云い表せない程でした。また、白瀬大尉の孫娘のきょう子さんが我が家に立ち寄られた時のこととか、思い出することは苦しかったことより、楽しかったこと。家族でいつも一緒に旅行や釣りなどに行ったことなどです。子供たちが健康で真直ぐに育てくれたこと等々。

世界で一番日本に遠い国、亜国にいつか良い日がきますように。孫も含め生駒一家全員17人(現在)の未来に希望をこめて。